

財団法人富民協会と農業博物館・本山考古室

山口 卓也

関西大学博物館学芸員

本山彦一は、大阪毎日新聞社の社長として、明治末から大正期にさまざまな社会貢献を行ったが、さらに自ら財団法人を設立して、「富民強身」事業を開始する。この中で「農業博物館」開設が発想される。それは、学会や専門家、政官界などで培った人脈を活用し、本山が福沢諭吉に接し慶應義塾で薫陶を受けたこと、藤田組で農村の現状を知り、大阪毎日新聞社で経営に携わって筆を振り、大正期大阪の社会的空気の中で骨肉となった精神を、自らの財団の中で形にするものであった。

財団法人富民協会

大阪毎日新聞社は、1927（昭和2）年6月、本山彦一の40年にわたる在職と功勞に報い、表彰金50万円を贈呈した。本山は、このうちの20万円を支出し、さらに朝鮮半島全羅北道井邑郡その他に所有していた水田地時価30万円を寄付して、財団の基本財産にあて、同年9月、「財団法人富民協会」の設立認可の申請書を農林大臣に提出し、設立が認可された（西村1937）。理事長には本山彦一が就任した。大阪毎日新聞社は事業を後援するものの、あくまで私の財団として運営された。1937（昭和12）年の財団基本財産は70万円、積立金は7万円に達している。1911（明治43）年に設立された大阪毎日新聞慈善団は、設立から昭和7年の本山彦一逝去までの間に大阪毎日新聞社から基金66万5千365円が支出されているので（故本山社長伝記編纂委員会1937 p 387）、それに勝るとも劣らない規模で設けられた私立財団であった。2004（平成16）年まで存続した。

本山の抱負が記された財団設立趣意書（1927（昭和2）年8月10日付）には、

「余は常に思ふ。國土狭少なる我國の農業は努めて集約的ならざるべからず。然も一戸の耕地面積少なるがために其些末の事項をも改良して増収の途を講じ、且其農閑を利用して副業に精勤して生計を補ひ、農民自家の福祉を増進せざるべからずと。これ余が大いに農事を改良し具苦行を奨励せんとする所以なり。而して古來富國強兵を唱ふるものあ



図1 設立時の財団法人富民協会本部

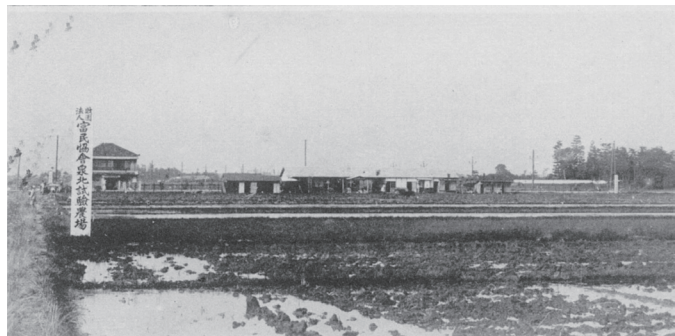


図2 泉北試験農場

るも、未だ富民強身を唱ふるものなし。余がここに富民協会を起し富民強身を高唱するもの、蓋し生活の安定を得て初めて心身を強壮ならしめよく富国強兵の實を挙げ得べしと信ずるが故なり。(部分)」

と記される(故本山社長伝記編纂委員会 1937 p 439)。農業は一つの産業ではあるが社会の基盤であって、そこから整えないと、富国強兵など画餅であるとして、まず農民と農村の生活改善を行うべきとした。

本山の意向により、「寄付した以上は、本山のものではない。またこの団体は、私一代のものではない。(省略) 将来は学者専門家によって、私の志を行って貰わねば」として、財団名に「本山」の名を冠しなかった。富民協会の富民は、趣意書中の「富国強兵」と対峙する「富民強身」から採られている。

設立された財団は、当初仮事務所を大阪毎日新聞社 4 階の一室に設けた。台湾総督府民生長官、満州鉄道初代総裁、内務大臣、外務大臣、東京市第 7 代市長を歴任した後藤新平と東京帝国大学教授、私立東京農業大学初代学長の農学者農業経済学者横井時敬博士を顧問、衆議院議員で大阪府立農業学校校長を務めていたことのある井原百介を理事とし、西村健吉が主事(のちに理事)として主管した。井原の薫陶を受けた人物などが技師や秘書として採用され、1930(昭和 5)年 3 月号の富民協会報には、西村主事・手島技師・中谷技師・眞砂書記の名がみえる。農場経営と事業、出版の活発化が進むと、1932(昭和 7)年には職員の数 40 名を超えた。

本山彦一と農業

大阪毎日新聞社長である本山彦一が富民協会を設立した経緯には、本山が若年のころ兵庫県勧業課長を勤め、のちに藤田組の総支配人として兎島湾開墾事業に携わった中で、農村を観察して疲弊した農村の実情を知ることとなり、国策上農業振興の重要なことを理解したからであるとされる(大阪毎日新聞慈善団 1931 p 450)。

大正年間には、「考古趣味」が高じて河内国府遺跡の発掘を行っている同じ時期に、第 1 次世界大戦があり、それ以後好景気と不況の波が繰り返され、また国内では物価高騰から米騒動が起きている。大毎慈善団での貧窮者支援の経験は、のちの大阪方面委員の活動と連なっていた。



図 3 富民協会兵庫県有馬郡本庄村の竹林



図 4 兵庫県赤穂郡上郡町篤農家視察の本山彦一

この時代の大阪は、人口の増加と流通の活性化、商工業の近代化と発展があり、一方では農村の生産性の低迷からもたらされた食料供給矛盾も生じた。朝鮮や台湾、南洋の植民地経営が軌道に乗り出したこの時代でもある。一方で、富国強兵の背後に置き去りにされる農村との分断が顕在化する。本山は、大阪毎日新聞社の舵取りをしながら、それが日本の「国体」に及ぼす不安を感じていたのであろうか。昭和2年、他紙に先んじて大阪毎日新聞は農業欄を設け、「富国」を軸とした紙面に、新たに「富民」という視点を加えた。昭和4年には世界恐慌が日本に波及し、本山の先見が現実となっている。

新聞社の経営者として開明的啓蒙的言論人、商工推進論者であるという側面が想起されるが、本山の晩年には、国民の半数以上を農民が占めるという日本の国情を考え、農業が建国の大本であるという考えに回帰した。「余の思想は、かように農業から商工立国に移り、再び農業立国に還って来たのである」との述懐が記録されている。

富民協会の事業

本山彦一が理事長であった設立当初の時期、富民協会として保持した施設は、以下である。

施設

財団法人富民協会事務所		大阪府泉北郡高石町羽衣 570 番地
泉北試験農場	1927 (昭和2) 年 11 月 13 日	大阪府泉北郡高石町南 246 番地
朝鮮出張所	1928 (昭和3) 年 4 月 1 日	全羅北道井邑郡龍北面新泰仁里
竹林指導地	1928 (昭和3) 年 3 月	兵庫県有馬郡本庄村須磨田
三島試験地	1931 (昭和6) 年 3 月	大阪府三島郡高槻町芥川
山林事務所	1931 (昭和6) 年 5 月	江原道淮陽郡上北面上田灘里
農業博物館	1932 (昭和7) 年 7 月 10 日	大阪府濱寺公園内官有地

事業には以下のものが行われた。

事業

米穀多収穫奨励 (1927 (昭和2) 年度より富民協会第1次の事業として着手。成績発表、褒賞授典式)、小麦多収穫奨励 (1930 (昭和5) 年度より)、多産鶏褒賞 (1931 (昭和6) 年度より)。

精農表彰 (1929 (昭和4) 年度より)、優良農事組合表彰 (1930 (昭和5) 年度より)、富民賞表彰 (1931 (昭和6) 年3月表彰規程を制定)。

農事改良副業奨励事業助成 (1931 (昭和6) 年助成規定を制定。品評会、競技会、競作会等に賞品を贈呈)。

展覧会開設 (全国農民芸術品展覧会を1929 (昭和4) 年6月から開催。全国農学校学生生徒作品展覧を1932 (昭和7) 年10月開催。自力更生展覧会を1932 (昭和7) 年12月10日より開催)。

講習会開設 (農業夏季大学を1929 (昭和4) 年より開設。農業改善研究会を1930 (昭和5)

年より開催。長期農業講習会を1929（昭和4）年より開催）。

優良種苗配給（1929（昭和4）年9月より）。

農業図書刊行（『協会叢書』を1928（昭和3）年から刊行。『農業夏季大学講演集』『農業年鑑』を発行。月刊雑誌『富民協会報』を1929（昭和4）年10月から発行。月刊雑誌『農業婦人』を1932（昭和7）年3月から発行）。さまざまな農業技術書、啓蒙書、体験記や事業記録を刊行した。本山彦一が著した『富民協会報』の巻頭言は、創刊から1932（昭和7）年に逝去するまで口述筆記で連載されたものであり、富民協会理事西村健吉によって、1933（昭和8）年、『富民強身 本山彦一』として刊行されている。

富民協会の事業は、ここで筆者が報告者として取って整理して構造化して考えることが許されるなら、日本の「農業」という空間に、米穀や小麦、鶏など多収穫奨励事業、副業奨励、優良種苗の配布などにより産業生産力を高め、収穫増、現金収入の確保などで農民と農村の生活基盤そのものに地力を付けて改善しようとする「奥行」方向の拡大を目指し、豊かさを得ようとしたもので、さらに、そこに展覧会や講習会、農業図書刊行による農民、農村の農業技能取得によって、さらに農民・農村の意識そのものを自動的に向上させようとする「垂直」方向が加えられたものとして構造化して考えることができるだろう。

本山は、この三つのベクトルを富民協会の事業に組み込むことにより、立体的構造的に日本の農業と農村社会の改革が可能となると考えたのではなかろうか。

特に「垂直」方向の動機づけを図り、農民と農村の自助の精神を根付かせようとする部分には、下級武士の子弟として福沢諭吉の薫陶を受けた青年期、兵庫県庁在職や藤田組支配人として児島湾開拓に携わった壮年期の本山自身の血肉となった体験が見えるだろう。大正から昭和初期の時代精神に触発された篤志農民や農家・農村が向上する、富民協会をして一種の社会的な「梯子」として提供しようとしたものであろうか。

設立当初、本山が顧問に後藤新平を招いたのは、後藤の「生物学の原則」に則った台湾統治、台湾協会大学改め拓殖大学学長としての手腕などを評価したからと推測できる。本山の立体的に構築された富民協会設立意図を実現する助言を期待してのことであろう。

さまざまな優良農家の顕彰や表彰の制度などが設けられているが、篤志農家が自ら精進することで状況を打開するというような「自助の成果」が、公に「認められ」、顕彰されることによる当事者の意識向上を織り込んでいくことは明らかである。本山は海外に渡航したことはないが、幅広い富民協会事業への協力者支援者が取り巻いており、また調査のための派遣を行ったりしていたことから、この富民協会のあり方は、イギリスやアメリカなどの牧畜業における「共進会」など欧米の先進的な農村

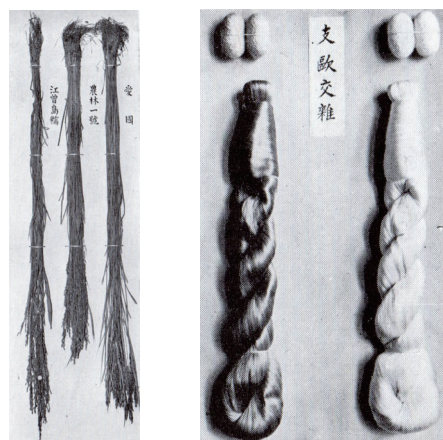


図5 天皇陛下下賜品(左)皇后陛下下賜品(右)

改革運動の波及についての情報も考慮できるかもしれない。引き上げたいモデルとして、おそらく大阪近郊などの都市との間の活発な交流と刺激、情報の流れのある篤志農家をイメージしているように見える。

一方、これら富民協会の事業は、辺地農業や自助の精神を育まない抑圧的な小作制度や大規模地主制度に大きく制約される当時の日本の農業構造自体には、富民協会の活動としてほとんど関与していないことに、当時の本山を取り囲む時代的な限界があることを指摘したい。

優良種苗配給について、附記しておきたい。国策として、1925（大正14）年に農林省の農業試験場や指定試験地が、農産物品種改良のための全国ネットワークとして整備されることとなり、水稻の改良が進んで、1931（昭和6）年に有名な水稻農林1号が育成された。早生で良品質・良食味、その上多収であったので、農家はもちろん市場にも歓迎され、急速に普及した。1941（昭和16）年には北陸・東北を中心に17万ヘクタールにまで達し、10～20%の増収をもたらしたという。富民協会農業博物館には、1936（昭和11）年に天皇から下賜された水稻農林1号と愛国種、江曾島粳が、皇后下賜の支交雑繭とともに、展示されていた（西村健吉1937 p 55）が、これも富民協会の優良種苗として配布されたのであろう。

農業博物館

本山彦一の『富民協会報』1932（昭和7）年2月号巻頭言「農業博物館の建設に就いて」に、「農業国である日本に、今日まであるべくして無かったのは農業博物館であった。ブタペスト、ベルリン、レニングラード等にはそれぞれ立派な農業博物館があって目からの大衆教育を行っているのである。博物館と云えば今日まで一般に回顧的な骨董品の陳列場のように考えられて居た。然るに米国に発達した自然科学博物館の影響を受けて近代の博物館というものは大人の生きた教室になって来たのである。凡ゆるものの原理が簡単に判るような仕組みになって来て居る。総てが生的で動的である。生活力がある。恰度百科事典を実物で行ったようなものである。従ってこれが教育上に与える影響の如何に大であるかは説明するまでもない。百聞一見に如かずである。本協会の農業博物館も、農業上に於ける左様なものに致したいと考えて居る。（西村健吉1937 p 52を一部改変）」と、自らの農業博物館を、真正に産業博物館に定義している。

また、「農業博物館建設趣意書」には、

「我国は農をもって國本とし、人口の殆ど半数が農業に従事しておる。これがため農業の盛衰は国力の伸展に影響すること極めて大である。歴代の政府も此處に鑑み、夙に農事の改良発達に努め、農業に関する大学専門学校等も各地に在するのであるが、現在農業に従事しつつある農村大衆の実物教育に資する完備した農業博物館といふも

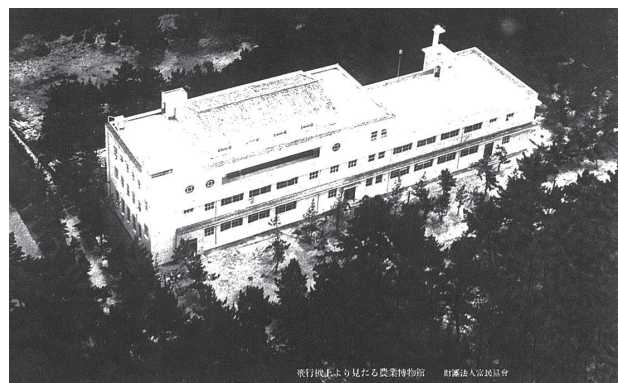


図6 富民協会農業博物館

のが一つも在しない。大衆教育の上に博物館の効果顕著なることは今更云うをまたぬ所で、大は皇室博物館、科学博物館、市民博物館等より更に細分され、鉄道博物館、演芸博物館の如き専門的博物館に至るまで存在せざるなく、然もそれらの博物館が斯業発達に貢献するところ少なからざるにも拘らず、独り国民半数の利害休戚に関すること最も大であって国家産業の大宗を占むる農業に於いてのみ、斯の如き博物館の存在を見ないのは国民経済の大局よりして吾人の痛恨禁ぜざるところである。ここに於いて竿頭一步を進め一般農村大衆の現代農業科学に対する知識の涵養と実物による農業における成人教育の徹底を期するため、自らの微力をも省みず、進んで農業博物館を建設し以て邦家農業の指導啓発に資せんことを企画するに至った。(故本山社長伝記編纂委員会 1937 p 452-454 一部改変)」

と記す。

農業博物館を開設した後、来訪する見学者、来賓、貴顕に本山彦一自身が自らよろこんで長時間の展示解説を行ったことは、来訪者すべてが驚嘆したと記録されている（故本山社長伝記編纂委員会 1937 p 454-457）。

富民協会に農業博物館を設けようとした本山彦一は、欧米に「博物館」という施設があって、どのような機能があるのかを日本に初めて紹介した福沢諭吉に薫陶を受け、すでに十分な知識があったのであろう。当時、神宮農業館があり、さらに帝国大学農学部・各地の農学校や官立農業試験場、試験農園、研究所などで専門教育と研究が行われるようになったが、広く国内の農民農村へ啓蒙普及するには、落差があった。本山は、農民や農村の精神的改善はおろか生活改善にすら結び付いていないという現実を理解し、「農村大衆の実物教育に資する完備した農業博物館」、より身近な教育施設として農業博物館を自ら開設することで打開したいと思ったのではなかろうか。先行する類似館である伊勢神宮の農業館とは画した意識が見える。本山自身には渡欧の経験はないが、欧米の農業改良運動と農業博物館の事情とその機能を熟知していることが知れる。

このような発想は、明治期まで先行して、本山の周辺の人物にもあった。帝國博物館初代総長で1897（明治30）年に「古社寺保存法」制定に尽力した九鬼隆一である。本山とほぼ同時期に慶応義塾で学んでおり、達磨絵に本山が賛を添えるなどの趣味世界での交流もあ



図7 農業博物館の展示

り、貴族院議員の同僚でもあったなど、本山と長く親交があった。九鬼の晩年には、九鬼の記念銅像除幕式に参列して式事を取り仕切ったこともある（故本山社長伝記編纂委員会 1937 p 32）。

九鬼は兵庫県有馬郡出身であったが、中央文部官僚として栄達した傍ら、在京同郷人の交流があり、帝國博物館総長就任すぐの1900（明治33）年、「地方博物館設立の必要なる理由」をその同郷人雑誌「有馬会雑誌」誌面に発表する（有馬会1900）。これには、国など中央の博物館産業館博覧会に対置して、地方にもそれぞれに博物館が必要であるとして、理由を列挙している（以下要約）。

- ①歴史上の必要：各地の独自の文化や歴史的遺物の保存・公開の必要
- ②地方の産業上必要：都市化が進む中、地方色を維持するための展示場所・博物館が必要
- ③地方遺物の散逸防止：神社・寺院・旧家等からの名品の数々を収蔵・公開するため
- ④地方精神の維持：地方独自の精神や特質を維持するために偉人の顕彰や、遺物の保管・公開するため
- ⑤観光資源としての活用：地方博物館を設置することで、観光客の知識と快感を向上させる
- ⑥中央博物館との連携：地方博物館と中央博物館が相まって、日本の文化の保持発展につながり、世界へも発信できる

九鬼の構想は、官による大規模な中央博物館と同等の価値があるものとして、それと補完関係にある地方博物館を構想したものであり、地方博物館のになう地域における機能と必要性を正当に評価したものであった。この構想の先進性は明治の博物館黎明期にあって突出したものであり、従来の博物館史研究では欠落している事績であるので、その価値をここで強調しておきたい。

この当時、本山は大阪毎日新聞監査役相談役兼任であったが、のちの富民協会設立と農業博物館設立の構想は、九鬼の構想の「地方」を「農業産業」に置き換えたものと相似する構造であることを指摘しよう。

九鬼隆一は、明治36年、有志団体有馬会の会頭に就任する。有馬会は、1884（明治17）年東京在住の兵庫県有馬郡出身者の親睦団体として始まり、1903（明治36）年に兵庫県有馬郡に移して地元の教育者や有力者を中心に再編成されたもので、名誉会員には、九鬼家と縁戚であった川崎造船所社長で西洋美術コレクターとして著名な松方幸次郎らも知られている。

その会規則総則の定める活動には、

- ①伝染病予防のための衛生知識の普及、衛生教育懇談会の開催（郡町村書記、町村長、巡査等の講演）
- ②農業の質的向上、農業改良を図る（苗代競作会、水田の形状や区画の適正化、種まき・水入れ・施肥・害虫駆除の適切化）
- ③地域の歴史継承を重視し、地域行政や教育行政の当局者や地域の有力者をまとめて様々な事業を計画・実施
- ④図書館事業の推進
- ⑤小学校教員の質的向上のため、夏期講習会を開催

があった。有馬会の会規則から読み取れるように、大阪近隣の兵庫県有馬郡に教育者や有力者を核

として構成された団体に、地域改善を目的とする事業、啓蒙普及、教育振興、青少年の健全な育成や図書館設置があるが、その中で農業改良・種苗競作などを自ら行っていたことは興味深い。有馬会の活動対象に、本山が啓蒙を意図した篤志農家に想定できるモデルケースが含まれていたと見えるであろう。関西周辺には同じような動向が広がっていたかもしれない。

九鬼は、中央博物館に対置・連携する地方博物館として、1914（大正3）年、郷里の兵庫県有馬三田地域の篤志家が作る有馬会を母体として、図書館に続いて三田博物館を設立する。建物は、旧有馬郡役所を改築した2階建て洋風造りで、九鬼が集めた伊藤若冲、雪舟らの日本画など絵画129、仏像14点、木札1点、古壺186点、平鉢18点、その他111点、約500点が展示され、入館料20銭であったという。地元有志団体の「地方博物館」三田博物館の展示内容が、三田という地域の歴史や美術にどこまで根差していたかは、今後研究の余地がある。

文部行政の中核にいる九鬼が、地方への積極的な視点を保持発想していたのは、九鬼が兵庫県有馬郡の出身であって、文部官僚時代から、ずっと地元への視点を保持し続けていたこと、福沢諭吉門下特有のエトスを保持していたことがまさに想起できる。有馬会の会規則総則に定める目的のため、地方博物館設立を行ったことは、中央政府の意図政策としての文部行政博物館行政の実行者として捉えられてきた九鬼隆一の、今まで知られていなかった、新しく見出された側面であろう。

関東大震災後、三田博物館が老朽化したことと防火設備のないことを憂いた本山彦一は、その保全工事をしたいと申し入れて、三田町長経由で支援したこともある（故本山社長伝記編纂委員会1937 p 32）。

大きく俯瞰してみるなら、「九鬼の有馬会と三田博物館」という構造は、「本山の富民協会と農業博物館」の構造に先行する事例であるとも考えられる。実際、この有馬会・三田博物館の事業として記された活動は、本山の富民協会や大阪毎日新慈善団の事業範囲と一致する活動が多く認められる。後藤新平と横井時敬博士を顧問、井原百介を理事として富民協会が設立されるが、本山と九鬼の親交の中で触発された理念発想が、本山の事業施策に反映されることもあったのではなかろうか。本山が農業博物館を設けること発想したのは、九鬼と同様に、訪欧の時に博物館の機能を正しく認識した福沢諭吉の思想的系譜、無意識有意識両方の目的意識共有が、いくらかでも反映したのではなかろうか。

同様の館是と館園が作る構造は、実はほぼ同時に京都帝国大学の濱田耕作教授も実現している。大学教育の中で濱田教授が重要性を指摘した「博物館」に関しては、京都帝国大学が創設された1897（明治30）年から構想があった。1914（大正3）年に文学部陳列館が竣工している。史学科各講座と美学美術史の文化史資料や考古学資料、文書を収蔵し、教育研究に資するための施設として機能した。実学虚学、考古学史学美学と農学という領域違いではあるが、早くから類似の実例が本山の身近にあったことになる。

ついでに本山の博物館関係の経緯を見直しておこう。1877（明治10）年に上野の教育博物館でモースの発掘した大森貝塚の土器を見学している。伊吹蛭の鑑定で名和昆虫研究所に陳列室を設けることを助力し、また南方熊楠の植物学研究所設立のための基金の出資をしている。九鬼の三田博物館を支援したことはすでに触れた。

関西圏の博物館史を見ると、1928（昭和3）年、大阪電気軌道（近畿日本鉄道）が設けたあやめ池遊園に、人類学民俗学資料を蒐集した九十九豊勝の東洋民俗博物館が招致開設されている（九十九2020）。白鶴酒造の嘉納家は、蒐集した中国古代の蒐集品を広く一般公開したいとして、1931（昭和6）年に財団法人白鶴美術館を設立している。村山龍平や小林一三の蒐集品を展示する財団法人美術館の開館は、戦後となる。九鬼の三田博物館から始まる関西圏の私立博物館美術館開設の胎動は、わずかながらも受け継がれ続けていたことがわかる。

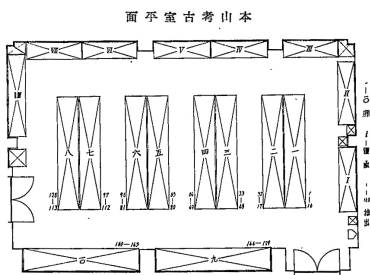
本山考古室

本山考古室は、本山彦一が蒐集した考古学コレクションを陳列する部屋で、農業博物館3階の一室に設けられた。農業博物館の広大な展示室に比べて狭隘に感じられる小部屋に、いっぱい展示ケースと収納棚が納められた。当時の写真を見ると展示ケースの間隔が狭くて撮影者が後ろに下がれず、俯瞰写真に苦勞がみられる。農業博物館本山考古室は、「特別研究家」の見学のみを許可していたとされ、限定的な公開であった。

大正年間から精力的な蒐集や地域の研究者との交流からの寄贈、自らの発掘調査の実施により本山の考古資料が増加していたところに、1930（昭和5）年、故神田孝平男爵旧蔵資料を流出から救い、1300点余りを入手したことでさらに充実した（徳田2013）。12月7日には、大阪府浜寺の本山邸で展覧が行われて、学者研究者などが参集した。

その時、この故神田孝平男爵旧蔵資料と本山彦一蒐集資料を合わせて閲覧した京都帝国大学教授濱田耕作は、

「本山翁の蒐集品といひ、神田男（爵）の旧蔵品といひ、之を手にとってみると、確かに我が考古学発展史を見る感がある。殊に河内、和泉付近は、奈良朝、飛鳥時代文化の根拠である二上山文化の発祥地である。此の地に住まれる本山翁が、故神田男の旧蔵品を手に入れられ、その他の出土品と共に我々の研究に資して戴くことは我国考古学界のた



一、列品の位置は上欄の如き順序により陳列してある。
 1. 櫛 考古室中央部及南側の水形陳列棚、一〇〇。
 2. 鏡 窓際を中心として周囲に配列し、一〇一。
 3. 漆器 窓の下方に各十六種の出土品を陳列する、一〇二。
 一、配列の順序は陳列地別に依つてあるが、櫛の
 前に陳列の順序に依つてあるものがあるのは、特に主
 要な資料を陳列前に陳列した故である。これは既述常
 例の故の意見に依つたのである。
 一、列品目録表は陳列上欄に附したの上欄の欄に
 一は陳列及び陳列に依りしものを示す。但し重要で
 るに非ざる資料一欄に依りし。



図8 本山考古室平面図

図9 本山考古室の展示

め慶賀に堪へぬ次第である。」

と述べる（故本山社長伝記編纂委員会 1937 p 546）。それからの本山は、蒐集資料について、昔の思い出話や研究上の感想を来訪者に語ることを楽しみにしたという（p 542）。

本山考古室に展示ケースを導入して本山コレクションが展示収蔵されたのは、本山彦一の私邸に収めたままでは、資料の研究利用や広く社会一般に公開することができないことを解消するのが第一の目的であったろう。ひょっとすると私邸の空間を圧迫するやむをえない事情があって、本山考古室を私邸から分離するため、新設を検討していた農業博物館の一室に押し込むように確保した可能性もある。

神田男爵旧蔵資料の入手後には、研究資料として資料を譲渡することにこだわりの少なかった本山でも、私邸に積みあがった2万点の蒐集品は膨大で全体を把握することに困難があったろう。また、私邸を訪れる研究者の内覧に、高齢となった本山自身が応じることも困難になっていたであろう。

「富民協会農業博物館本山考古室」と、富民協会（の設立運営する）農業博物館（の中にある）本山考古室の脈絡で呼称されるのが一般ではあるが、農業博物館の展示構成と本山考古室の展示構成の間には、特に連続性は認めにくいので、独立した展示空間として捉えたほうがよい。考古室を受け入れた側である富民協会の「財団法人富民協会設立趣意書」や「財団法人富民協会寄付行為」に定める「第1章目的及事業」にも、考古室についての言及や事業内容の定めはない。これから推測すると、本山考古室は、富民協会の3階に移転した後も、本質的には本山の私有コレクションの性格を保っていたと考えてよい。本山考古室の一般的な管理は、おそらく農業博物館全体で行われていたのだろう。

最終的に私的空間から切り離して蒐集を公開し、あたかも京都帝国大学文学部陳列館（濱田1928）のように、教育研究に資するものへの転換をはかろうとしたと考えることができる。本山考古室は、研究機関に付属併設される博物館ではなかったが、考古学という分野への学術資源を、広く学会研究者一般に分け隔てなく公開し、まさに教育研究に資するものとなったことになる。

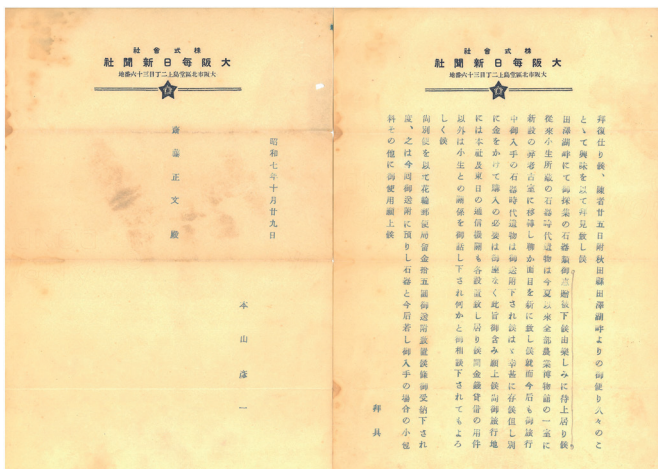


図10 本山彦一から斎藤正文宛手紙

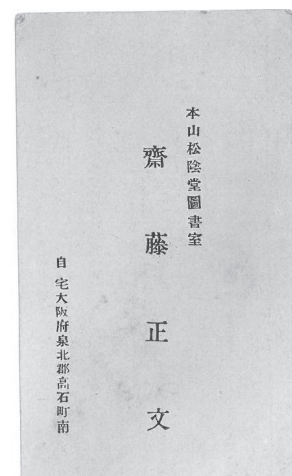


図11 斎藤正文名刺

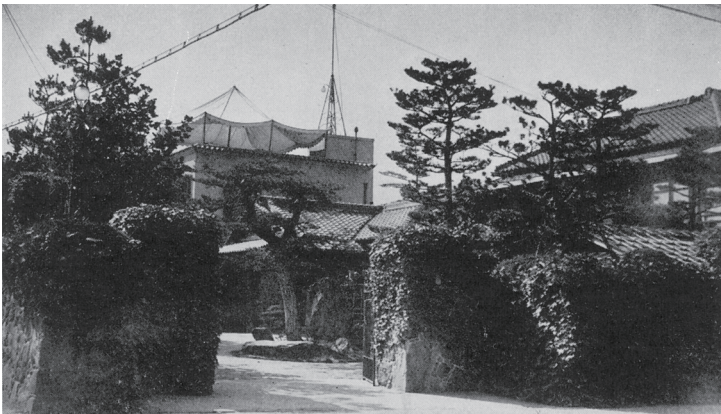


図12 羽衣本山邸・農業博物館遠景



図13 毎日新聞特派員の調査団

なお、三大発掘の一つ、1929（昭和4）年に行われた肥前古陶窯の発掘資料は、「採集品（成品、残欠、破片）二万数千点」あって、1930（昭和5）年12月に東京日日新聞社内、翌年大阪毎日新聞社内、さらに7月京都恩賜博物館で展覧を行ったとされる。2万点を超える陶磁資料は膨大であり、東京への搬入が貨車何台かに及んだとのエピソードもあって、保管場所はかなりの空間が必要であったと思われるが、本山考古室で展示や収蔵した痕跡はなく、『本山考古室要録』にも登録はない。また、関西大学博物館にも引き継がれておらず、所在不明となっている。

本山の考古資料蒐集は、自らの発掘や採集旅行、地方研究者や大阪毎日新聞特派員や地方支局員からの寄贈があった。これらは、資料本体にしばしば記される寄贈者名で確認することができる。

本山の蒐集を助ける協力者を派遣することもあった。香川県在住の斎藤正文は、大阪毎日新聞社の日本環海海流調査の成果と科学的精神に感銘を受けて、小学校教諭を辞して来阪し、本山のもとで考古資料の収集を担った。「本山松陰堂図書室（松陰は彦一の号）」の所属と記す名刺がある。今のところ差し入れ先を発見できていないが、各地の研究者や好事家と交流する際に交換したものであろうか。本山彦一や大阪毎日新聞社秘書課との通信があって、斎藤正文は信州や東北地方で蒐集した石器や土器を本山のもとに送付したこと、大阪毎日新聞社からの経費送金を各地の支局で受け取り、支援も受けたことが判明している。1932（昭和7）年11月3日頃、秋田県田沢湖周辺から家族に「恐山方面に移動する」と伝えたのち、足取りが不明となっている。

本山考古室の展示ケースの割付は、京都帝国大学考古学教室の濱田耕作教授の著書『博物館』（濱田1929）や京都帝国大学陳列館の分類方法に類似している（山口2011）ことから、本山は考古室を濱田の指導する当時の考古学に従って分類して展示した可能性がある。さらに、濱田の指示によって京都帝国大学考古学教室から教室員であっ

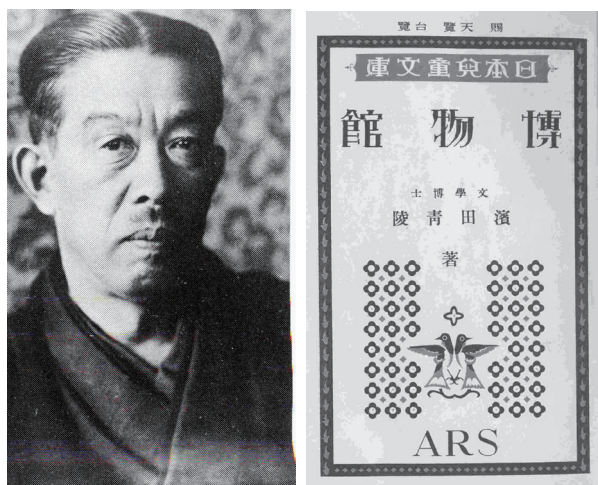


図14 濱田耕作(左)と『博物館』(右)

た末永雅雄が派遣されて、考古室の収蔵資料を整理した（末永 1986）。小林行雄も実測図作成に従事した。収蔵資料の目録と図録を刊行することで、本山は自らの考古学研究（趣味）の、まとめ（区切）とする考えがあったかもしれない。本山の逝去後に『本山考古室図録』『本山考古室目録』『本山考古室要録』（末永 1935）が刊行されている。本山考古室で果たされた学術情報資源の全面的な公開の最初の利益享受者は、末永雅雄と小林行雄であったことになる。

本山彦一の研究趣味と蒐集

もともと本山には骨董や美術品蒐集にこだわりがなく、藤田組支配人となってから社交場の必要が生じたこと、藤田傳三郎が有数の新古美術蒐集家であったことから、この方面の趣味を覚えたと言われる（故本山社長伝記編纂委員会 1937 p 554）。書画骨董については、学術的価値のあるものを好み、あえて参考のために「贋物」も手元に置いていたという。古銭などの蒐集もあった。

甲冑や刀剣の蒐集では、大須賀五郎左衛門着用紺糸緘大具足や朱鞘槍、包持太刀、衛府太刀などを愛玩した。鏢や鞘、目貫など刀装具も時代別に整理してあったという。古刀新刀を集め、新素材での日本刀制作もおこなったという一種の刀剣工芸研究も行った。研究者には容易に所蔵刀剣等を研究資料として与えたという。昭和初期、刀剣研究上重要なコレクションとして刀剣愛好家の間で著名であったので、本山考古室の整理を担当していた末永雅雄は、サンデー毎日誌上に連載していた「考古物語（本山松陰堂蒐集より）」の中で取り上げたことがある（末永 1932）。

また、中国・朝鮮半島、日本の金石文拓本類も蒐集している。日本の拓本類は、大阪朝日新聞記者であった木崎愛吉が明治末から大正期に蒐集したものが含まれている（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター 2008）。中国朝鮮半島の著名石碑や墓石、金文、有名人の碑文などがある。特に茶掛けなどにされたものはなく、拓本類はほぼ採拓時のまま畳まれて保管されていて、一種学術資料として考古学資料と一括して扱われていたと思われる。

関西圏の政財界人、各界の代表者、学術界とは、茶会などでも交流をもち、そこでも古美術の蒐集と鑑賞を愛好した。慶應義塾出身で三井の重役を勤めた後、茶人となった高橋義雄（箒庵）との交流の中で、1917（大正 6）年の私信で「小生は素より茶事に慣れざるも、茶を喫することを好み、又其記事を読むことに大に興味を覚候次第に御座候。伴し未だ茶人之門に入るを肯ぜざるは、頑迷不霊か、年少気鋭か、老人にも不似合いなりと御憐笑被下候事と奉存候。（部分）」と記して、未だ自らを茶人ではないと謙遜した。その後、1931（昭和 6）年、高橋の茶事に招かれたことの礼状には、「御道具之数々、誠に御結構面白く拝見仕候へ共、不風流無茶味の私には、評すべき辞も無之、唯々感心仕候。」と一応謙遜したあと、展覧された茶器や掛物、花などに風流趣味の賛辞を寄せて、このころ茶事への見識の深まっていたことを覗かせ



図 15 茶器にされた縄文土器・新羅土器
（関西大学博物館）

る。そのあとに「柵尾産遺香の濃茶、一段の美味甘味、何人之製造法か不存候へ共、恐くは耕種法に一段の研究をされたるものと、小生の専門農業上より観察致候。御好之替茶碗、菓子器の出血、余技の光彩を放ち、面白く拝見感心いたし申候。」と続け、本山の農業研究、茶栽培への知見から感想を述べている（故本山社長伝記編纂委員会 1937 b p 407）。

昭和初期、本山彦一は美術・骨董品の有力な蒐集家となった。1928（昭和3）年に発行された「大日本国宝古金銀数寄者見立」は、「名品」とよばれるような美術・骨董の有力所蔵者を番付したもので、本山はここで関西圏の「関脇」にランクされている（斎藤 2012）。この番付には考古資料の蒐集はあまり評価していないとみてよいので、このころには主に美術骨董の有力数寄者とされていたことになる。

1902（明治35）年頃からしばらく、藤田男爵家など関西圏の財界人を中心として、書画骨董を展示展覧して煎茶などを楽しむ茶会「十八会」を開いて展覧を催していた（山口 2018）。茶会と美術骨董を楽しむ「数寄」の流れは、個人が楽しむ愛玩鑑賞の性格が強く、博物館的な「公開」とは距離があったといえる。戦後の相続税法などの規定により、次第に個人蒐集のコレクションは散逸を免れるために財団法人美術館に収斂していく流れができて、関西圏の財団法人博物館・美術館に至ることになる。

本山が支配人を勤めた藤田組の藤田男爵家の蒐集品が美財団法人美術館として公開されるのは1954（昭和29）年、宝塚少女歌劇のチャリティ公演で大阪毎日新聞慈善団の募金活動に協力した箕面有馬電気軌道小林一三の蒐集品が逸翁美術館になったのは1957（昭和32）年、大阪朝日新聞社主村山龍平の蒐集品が香雪美術館になったのは1973（昭和48）年であった。

本山の蒐集した考古資料と金石文拓本類は、「本山考古室」「本山コレクション」として末永雅雄の手によって博物館資料に昇華した。一方、刀剣や古武器類、書画骨董など趣味愛玩による蒐集品は、本山の逝去後、その他は農業博物館に展示室を構成せず、本山家のもとに残ることとなったことも記録したい。

参考文献

- 大阪毎日新聞慈善団 1931 『大阪毎日新聞慈善団二十年史』 大阪毎日新聞慈善団
 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター 2008 『木崎愛吉旧蔵 本山コレクション金石文拓本選』 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター
 関西大学博物館 2010 『関西大学博物館蔵 本山彦一蒐集資料目録』 関西大学博物館
 九鬼隆一 1900 「地方博物館設立の必要なる理由」 『有馬会雑誌』 第5号 有馬会
 故本山社長伝記編纂委員会 1937 『松陰本山彦一翁』 大阪毎日新聞社
 故本山社長伝記編纂委員会 1937 b 『松陰本山彦一翁遺稿』 大阪毎日新聞社
 斎藤康彦 2012 『近代数寄者のネットワーク 茶の湯を愛した実業家たち』 思文閣
 末永雅雄 1932 「考古物語」 『サンデー毎日』 昭和7年2月28日号～12月8日号 大阪新聞社
 末永雅雄 1935 『富民協会農業博物館本山考古室要録』 岡書院

- 末永雅雄 1986 『常歩無限 関西大学考古学廿年の歩み』 関西大学教育後援会
- 九十九弓彦 2020 「東洋民俗博物館のあゆみ」『阡陵』No.80 関西大学博物館
- 徳田誠志 2013 「神田孝平から本山彦一へのバトンリレー」『阡陵』No.66 関西大学博物館
- 西村健吉 1937 『財団法人 富民協会十年史』 財団法人富民協会
- 西村健吉 1933 『富民強身』 明文堂
- 濱田耕作 1928 『京都帝国大学文学部陳列館考古図録』 京都帝国大学文学部
- 濱田耕作 1929 『博物館』 日本児童文庫
- 本山彦一 1927 『財団法人富民協会設立趣意書』
- 山口卓也 2011 「本山コレクションの由来」『関西大学博物館蔵 本山コレクションの由来』 関西大学博物館
- 山口卓也 2018 「蓑虫山人の片口形土器—本山コレクションと数寄者・好者—」『阡陵』No.77 関西大学博物館